特集

充実する医療体制

断らない救急医療を目指して

市民の医療のとりでとして、常に身近な診療所との連携を図りつつ、医療体制の強化を進める地域の中核病院。その中でも中心的役割を担う秦野赤十字病院から、秦野の医療の「今」を紹介する。

問い合わせ　健康づくり課☎(82)9603

秦野赤十字病院では、小児科や脳神経外科、耳鼻咽喉科の医師を増員した昨年に引き続き、今年も新たに救急科や皮膚科に常勤医師を配置。現在29の診療科などにおいて幅広く質の高い医療を提供している。

そんな中、特にこれまでと比べて大きく変わったのが「救急医療体制」だ。

市内では、二次救急医療施設として、秦野赤十字病院と同じく、24時間体制で手術ができる設備を備えた神奈川病院と八木病院の3病院が、輪番で平日夜間や休日の救急搬送を受け入れている。

重症患者の救急要請に対し、消防の救急隊と共に医師が同乗する救急ワークステーション(3面に掲載)を実施する秦野赤十字病院の救急科では、今年關知子部長(左写真)が赴任したことで、月～木曜日は常勤医師と非常勤医師の2人体制となった。救急患者の受け入れ中でも新たな出動要請を受けられる体制が整ったことで、今年7月の救急入院と救急外来の総数は、昨年同月比で約1.4倍となった。

迅速で的確な初期治療を

關部長は「救急は1分1秒を争うスピード勝負。初期治療の後、すぐに各診療科や場合によっては他病院につなげられるよう、連携を密にしています」と頼もしい表情で話す。

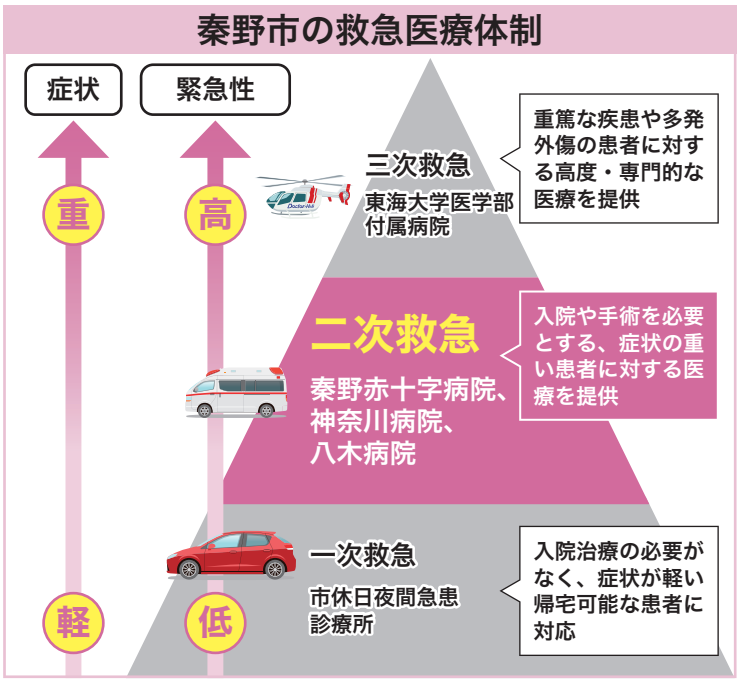
また、小児医療の充実が図られたことは、小児二次救急医療の受け入れにもつながった。これまで伊勢原協同病院でしか受け入れができなかった小児二次救急。昨年からは小児科医師の対応可能な曜日に限ってはいるものの、秦野赤十字病院でも受け入れができるようになった。小児二次救急の今年4～6月に受けた救急外来や救急搬送の総数は、昨年の同時期は18件だったのに対し、約6倍の105件となっている。

さらに小児救急専用のホットラインを設け、救急隊からの連絡に基づく、迅速な治療を行う万全な体制も整えた。

「子供は急に具合が悪くなることもあります。迷わず受診してください」と小池部長は優しく話す。

医師増員により目に見える変化が表れている秦野赤十字病院。「断らない救急医療」を目指すという同院の今後に、期待が膨らむ。

「入院時に親御さんも付き添えるのは当院の強み」と話す小児科小池秀樹部長



二次救急医療施設 最新情報

秦野市の二次救急医療を支える三つの病院。診療体制の強化が進む秦野赤十字病院と共に、神奈川病院と八木病院の先端医療への取り組みを紹介する。

秦野赤十字病院

市との連携で強まる医療

「市民に頼ってもらえる病院づくりが、ようやく実を結び始めましたよ」と笑顔で話すのは田中克明院長。かねてから地域医療をけん引するという使命感をもって病院運営に取り組んできた。

田中 克明 院長

小児科において、生後1か月以上の乳幼児の入院も可能となった今年、皮膚科では、これまで市内にはなかった入院患者の受け入れも始まった。「患者さんが市内で安心して治療に専念できる環境が整いつつあります」と、医師が増えたことに伴うメリットについて力を込めて話す。

こうした環境づくりに欠かせないのが「市との連携」と田中院長は言う。「財政的支援はもちろん、東海大学医学部の救命救急科や小児科の医師派遣に協力していただいたことは救急医療体制の充実につながりました」と話す田中院長は、診療所など他の医療機関との連携や役割分担で、今後さらに市や東海大学医学部付属病院との協力体制を強化したいと期待を寄せる。

市内医療機関の要として

通常診療や救急医療に加え、秦野赤十字病院の持つ大きな役割が災害時の救護業務だ。

今年11月19日(土)、関東1都9県における日本赤十字社の各支部が一堂に会し、同院や市内小中学校を会場として、大規模地震を想定した傷病者などの救護訓練を実施する予定となっている。もちろん、秦野赤十字病院もこの訓練に参加する。

市内医療機関の要の一つとして、平時であっても災害時であっても、常に市民が健康で安心して生活できる環境をサポートしたいという田中院長。さらなる医療の充実のため、現在は救急診察室に隣接するCT室や、脳神経外科用の第2血管造影室の整備を進めている。

「私の残りの任期の1年半。休止中の診療科の再開など、全力で診療体制を整えていきます」と話す田中院長の目は力強く、輝いている。

神奈川病院

高画質で微細に撮影

新病棟の運用が始まって1年が経過した今年3月、最新技術が搭載された高機能MRI検査機器「MRI 1.5テスラ」を導入。従来の機種では撮影できなかった脳静脈の細かな出血や脳の血流、脊椎の骨皮質などを詳細に把握することができるようになった。また、血管検査では、血管を見やすくする造影剤を使用せずに撮影できるため、体への負担が軽減された。

効果的な治療や救急医療の現場での活用が期待される。

八木病院

マンモグラフィー検査用装置

整形外科での積極的な診療に取り組み、最新機器による治療に力を入れている。「対外衝撃波疼痛治療装置」は、神経障害などの治りにくい痛みに対する新しい治療法。スポーツ選手を中心に、多くの患者が治療を受けている。また、従来では入院や手術が必要だった難治性の凍結肩や変形性関節症などは、エコー治療の導入により患者の負担が軽減された。

さらに今年から、最新のマンモグラフィー検査による乳がん検診をスタート。微細な石灰化や小さいしこりも画像に捉えることができるため、早期発見に有効だ。同院で子宮頸がん検診も同時受診できるため、利便性の向上も図られた。